



萬日法会供養塔



第116号

## ありがたいお念仏のお勤め

### ―別時念仏会と不断念仏十九萬日法要―

教学部長 別所 泰広

宗祖真盛上人は、「円戒国師奏進ご法語」の中で、「御手に数珠を取らず、御口に声なくとも、御忘れなきばかりが念仏にて候べく候」と述べられています。

信心を大事にして疑いの心を起こさなければ、お数珠を手につけず、声に出さなくても、心に留め置くお念仏が上人のお示しになられたお念仏といえるのです。

この上人のお念仏は、「不断念仏(常念仏)」と呼ばれ、私たちが、心を正して、阿弥陀様のお誓いを信じ、極楽に上品往生して、仏様の知恵と慈悲でもって、人々の安穩を願うものであります。比叡山での長年の修行の後感得されました「往生の極意」ですが、上人は皆様にそのお念仏を習得いただく為に「別時念仏会」を修する事をお勧めになりました。

これは、一日、三日、十日、四十八日(阿弥陀様の誓いの数)、九十日と日限を区切って、その期間中はすべての世俗の業務を忘れ、念仏一途になるために設けられたありがたいお勤めです。

そして、別時念仏会を修し、上人のお念仏を広く知らしめるため、各地に「不断念仏道場」を開かれました。

ご本山西教寺を初めとして、福井県では引接寺、西光寺、放光寺、青蓮寺、蓮光寺、三重県伊賀では西蓮寺、九品寺、西福寺、西盛寺、伊勢では西来寺、成願寺、恵光寺、称名寺、蓮生寺、光泉寺の十六ヶ寺で別時念仏会が勤修されました。

本山西教寺では、今でも毎年九月最後の土日、その「別時念仏会」を開催しています。

さらにもう一つ、本宗としまして上人の不断念仏(常念仏)を後世に繋げるため、万日法要(一万日ごとの法要)が勤修されています。

記録を見ますと、元禄七年(一六五二)三月十五日、宗祖常念仏開白七万日法要が勤修されました。

万日法要の開催はこれが最初ですが、当時西教寺一門は、徳川幕府の命により、天台系の別派「安樂律宗」の中に取り込まれ、東叡山輪王寺(今の寛永寺)の傘下となりました。

これに危機感を持った西教寺は、宗祖のみ教え「常念仏」を後世に伝えるべく、ありがたいお念仏のお勤めとして、この法要を盛大に修しました。

この時、浄瑠璃「大念仏七万日詣」が所演され、西教寺の門前を中心に数多くの茶店、見世物小屋も立ち並び賑わいを見せていました。特に見世物の興業は、信仰を兼ねた人々の娯楽の場でありました。

この法要は、八万日、九万日、十万日と続くごとに盛況を呈したとのことでした。

平成十二年、十八万日法要が勤修されてから早十六年、十九万日法要にお出会いできる御勝縁の日が近づいております。

その節はぜひご参詣いただき、滅罪生善、現世安穩、後生善処を祈願、天台真盛宗に御縁のありましたことを喜びたいと思います。

合掌



# 「念彼観音力と法悦」

## 十一面観世音菩薩 中開帳法要

滋賀県真野普門光明寺住職

前 阪 良 憲  
(深光寺住職)

### 一、降雹大雨

光明寺の本尊は十一面観世音菩薩です。(以下 観音菩薩) 三十三年目に本開帳法要、十七年目には中開帳法要を厳修しています。

今年が中開帳法要の年に当たり、去る四月十七日(日)に地元の普門信徒さん、善男善女、老若男女が、参詣さ

れ盛大に勤まりました。三年前ご縁あつて兼務住職を拝命いたしました。

私が観音さまの念彼観音力によって勤めた法要の様子と観音経の一節、降雹大雨のお話をいたしたいと思います。事実、前日の準備は好天に恵まれていましたが、天気予報では、四月十七日は、大雨との予報でしたので、実行委



(写真提供：大津市歴史博物館)

員会の役員さんは、何日も前から大雨を予測、境内一帯を雨除けのために大テントを張り準備されました。十七日は、天気予報通り前日の夜半



お稚児さんのお練りと住職

から土砂降り、とてもお稚児行列等お練りができる状態ではありません。雨対策を考えつつ十時に開關法要を勤めました。雨は一向に止まず、お練りを諦めずにいられたかったのですが、ところがお厨子の御扉を開け『観自在菩薩 行深般若』とお経を唱えるや否や、薄暗い堂内であつたのがやや明るくなり、不思議なことに今まで降っていた大雨が小雨となり、空がやや明るくなつて本堂に陽が差してきました。です。それでも降ったり止んだり天候で、お練りの正午には晴れるよう祈りつつ待つていました。有り難や十二時半頃、空は明るく四月の好天、青空となり陽が差してきました。観音菩薩の御利益をいただき一同安堵いたしま



光明寺到着前に突風が



信徒総代を先頭で御詠歌のみなさま





お念仏踊り

した。予定通り普門自治会館を出発、露払い信徒総代を先頭にご詠歌講二十六名、住職、招待僧、稚児三十名、信徒約百余名の大練供養が真野普門の町の中を約一時間に渡ってお練りです。家の先々で町衆の方が手を合わせて拝み、可愛いお稚児さんに拍手、曇っていた空も青空となり、赫々と光が照し朗々と流れる御詠歌の美しい声と鈴の音の中、善男善女、法悦の行列が続きました。ところが神田神社鳥居前、光明寺へあと約一〇〇メートルで到着するところで、突然、天候が変わり突風が吹き、お稚児さんが立ってられない。導師の朱傘が風でさせないくらい、ビュービュー荒くんだ嵐、空は、どんよりと今でも、大雨が降りそうです。

手に持っている物が吹きとぶような強風となりました。

ひとりの役員がとんできて、いま本堂の中が風で、花立て、ローソク立て、供物が風で散らかり、それを整えているからゆっくり歩いてほしいとの伝言、ゆっくり境内に着いても嵐は止まらず、塔婆前の三具足は吹っ飛び経本を開けることも出来ない状態です。

しかし、不思議や、お稚児さんが内陣へ入堂、観音菩薩前で小さな手を合わせ、観音さまを拝みはじめると、今までの猛風が止み、静けさを取り戻したのであります。

私が『抑も十一面観世音菩薩ご恩徳報謝の庭：(中略)：普門ノ在所ノ名ハ観音ノ威徳アリ、当地ニ良ク災厄ヲ防ギ巨益ヲ施シ玉ウ。而シテ茲ニ平成二十八年四月十七日十一面観世音菩薩中開帳ヲ迎エ稚児、詠歌奉納、及び実行委員会、お練り供養奉納ヲ厳修シ、念彼観音力の法悦ヲ頂キ普門光明寺信徒善男善女同席結縁ス、オモンミレバ正ニ今修スル所、観音ノ妙行ニ、三業ノ罪障ノ消滅ヲ願。観音ノ靈驗ヲ迎グ願クハ、観音妙智力ノ威力、益々増益シ慈眼視衆生。福寿海無量ニテ万民快樂シ、地域興隆セント：と、法則唱エ奉ル』や否やなんと外が明るく陽が差し込んでいるではありませんか。風も止み、観音経一節に『雲雷鼓掣電 降雹澍大雨 念彼観音力 應時得消散』

俄に雲が出て一天嵐になり、雷が鳴り響き、稲妻が大地に向かっておそう、でも観音さまの力を念ずれば、時、またずして消え去って嵐も止んでしまうでしょう。

その現象が現れたものではありませんか。念彼観音力 應時得消散、まさしく普明照世間。澍甘露法雨でありました。不思議な現象の中、法要が進められました。法要終了後には明るい青空となり光々と輝き盛況裡に厳修することができました。第二部として中開帳実行委員会が熟慮を重ね、法要と芸能奉納、併せて、日本仏教文化を取り入れ、御詠歌奉納、大正琴演奏、三味線尺八合奏、続いて念仏踊りで盛り上げ最後に住職の法話をもって十六時四十分になり十一面観世音菩薩の御屏が住職によって静かに閉められました。御利益を頂いた法要でありました。

平成四十五年(二〇三三年)には本開帳を迎えることになりましたが、今から福聚海無量 普門示現(一切の諸菩薩が現れて)を勧悦を念ずる次第です。

## 二、普門と光明寺の縁起

光明寺は湖西道路真野インター東北約五百米の位置にあり、神田神社(彦国革命)と境内は一带となっています。神田神社に保存されている棟札の中に(大津市史参照)

「神田大明神社頭安全村内繁昌祈修

文化三寅于八月二十日(一八〇七)遷宮導師光明寺現住満空」とあり、光明寺の住職が祭司していたので神仏習合の寺として繁栄してきたことがわかります。縁起によれば、本尊十一面観世音菩薩は、聖徳太子が「諸難消滅」御厄除の作と伝えられています。

九十六代後醍醐天皇(一三三八)が比叡山横川谷に安座、その後、嘉暦元年(一三二六)勾然と土山(現在の地名は庄之本)移され、観音の山と称されました。元龜二年(一五七〇)織田信長が、比叡山焼き討ち四方散乱の中で灰燼にならんとするところ、火の中から光り輝き十一面観世音菩薩が、お立ちになってお出ましになったことが諸人(普門の人々)が世に不思議な観音菩薩と信仰され、草庵を造営したのが、現在の普門山光明寺であります。

普門の地名は、いつの頃は判らないが、観音経の中に「観世音菩薩普門品」「普門示現」「佛說是普門品時」とあるように観音の地であることを広く、観音妙智力の御利益を頂きたいと思いつから、普門という地名を名付けられたのではないかと推測されます。

ちなみに光明寺は普門の寺院として厚く護持され、真野普門自治会が、大きなバックアップとなっています。信徒は、普門にあります浄土宗専修院の檀家であるとともに光明寺の信者として十一面観世音菩薩を厚く信仰されています。

# 真盛上人往生伝記 にふれる

## 第2回 慈愛に満ちた最期のおことば

真盛上人は御往生に際し、最期のおことばとして「相構えて無欲清浄にして念佛すべし。」さらに同じ内容で念を押されるようにもう一度「相構えて無欲清浄にして能々念佛すべし」とおっしゃいました。このおことばは真盛上人の「御遺命（最後に遺された教えのお言葉）」として、最も敬い大切にすべきであると『真盛上人往生伝記』の中で説かれています。このおことばを源流として「戒称二門」すなわち、戒をたもちながら念佛に専念するという本宗の教えが、私たちにまで脈々と受け継がれてきています。この本宗の根本ともいえるおことばの中の「相構えて」という部分に今回は注目してみたいと思います。



「相構えて」という言葉は、「相（あい）」古語では「あひ」と「構えて」という二つの語から成り立ちます。「あい」は「一緒に、互いに」という同伴の意味、或いは「たしかに、まさに」というように語調を強めるような意味を持ちます。「構えて」は「ぜひと、なんとかして」という意味を持ち、命令や意思を表す言葉（この場合は「すべし」と呼応して「必ず、きつと」というニュアンスを表します。従って「相構えて」は「ぜひと必ず」という意味を古語（平安・鎌倉時代の日本語）においては表わしていました。ところが、真盛上人が活躍された室町時代になりますと現代語と似た「心構えをして」というような意味も持つようになってまいります。

真盛上人は自らの教えを慕い集まった弟子達のことを心から氣遣われ、最期のおことばを重ねて二度おっしゃいましたが、「相構えて」は「しっかりと心構えをして」という教えと、「必ずやきつと」という真盛上人の弟子達に対する慈しみという両方の意味を持ち、「心構えをして必ずや教えを守り、実行しなさい」という真盛上人の願いと弟子達に対する慈愛の心を示している、と考えるべきではないでしょうか。

真盛上人の教えを受け継ぎ信奉する私たちには、阿弥陀さま

のお慈悲とともに真盛上人の慈愛が届けられているということを「相構えて」という語の意味からでも感じることができます。真盛上人の慈しみに思いをはせ、感謝しながら御念佛をしていきましょう。

（文責 宗学研究所已講 市川直史）

## 第六回『真盛上人往生伝記』輪読会

【日時】平成二十八年七月十二日

（火）十八時より

【会場】越前武生 引接寺に於て

## 私のしんじん

### 『鰯の頭も信心から』



滋賀教区瀬田・西徳寺

檀徒 内田 一豊

昔よく耳にした古諺に「鰯の頭も信心から」と言う言葉がある。解釈の仕方によれば、「森羅万象全てが信心の対象になる」とも言えるが、私流の解釈は「世の全ての事象に感謝する心を忘れるな」と言う理解である。

今、仏教界は未曾有の危機に直面していると言えないか？マスコミの報道等で、

一、二十五年後には日本の寺院の三〇%が廃寺となる。  
二、困窮寺院が新興宗教に狙われている。

三、大手宅配業者が僧侶の派遣業務を手掛け、五〇〇名あまりの僧侶が登録しその多くは、今のままでは食べて行けないので登録した、と言う事である。

等々枚挙に暇がない程、我が仏教界を取り巻く現状は厳しい、本当にこれでよいのか？と思うのは私だけか？皆さんと共に一考しなければならぬと思います。

一昨年賑々しく盛会裏に斎行された「恵心僧都一千年御遠忌大法要」の際入手した「往生要集」に「歩々声声念念唯だ阿弥陀仏に在り」とある、この意義をどう理解し行動に移すのか？

今一度僧侶も檀徒も仏教の原点に立ち返ってみる時期が来ていないか？宗門一山挙げて真剣にこの危機を突破するための方策を早急に検討するべきであると考えます。

「鰯で精進落ち」とならぬ様に、日々ご先祖の恩恵を忘れることなく「明日に礼拝、夕べに感謝」を忘れないように努めたいものである。

合掌







# 比叡山恵心僧都遠忌に参拝して

新緑の比叡に響くお念仏の音

五月二十一日(土) 天台真盛宗による「恵心僧都一千年御遠忌法要」が延暦寺根本中堂にて勤修されました。

天台宗が主催する、天台宗祖師先徳

鑽仰大法会の一環として開催されたもので、西村猥下を導師に、武田西蓮寺御山主、寺井西来寺御山主等十四名が式衆として参列しました。又参詣者

は、前日から檀信徒、寺庭婦人研修会に参加いただいた皆様及び、当日参加の伊賀教区御詠歌講、一般参詣者両者合わせて二百六名を数えました。

叡山会館を出発したお練り(式衆)が根本中堂正面から入堂するや御詠歌講の「薬師瑠璃光如来和讃」の奉詠が始まり、着座後猥下の表白、菩薩戒經、念佛和讃(御詠歌講)と続き、その後

参列者二百三十六名全員にて、恵心僧都和讃等をお唱えしました。  
念佛回向、猥下のお十念の後、伝教大師讃仰和讃、真盛上人が勧められた別時念仏を修して法要を終えました。  
当日は天のご加護か、新緑眩しい一日となり、参詣者は観光の後帰途につきました。



延暦寺会館に御僧侶ならびに参拝者全員参集される

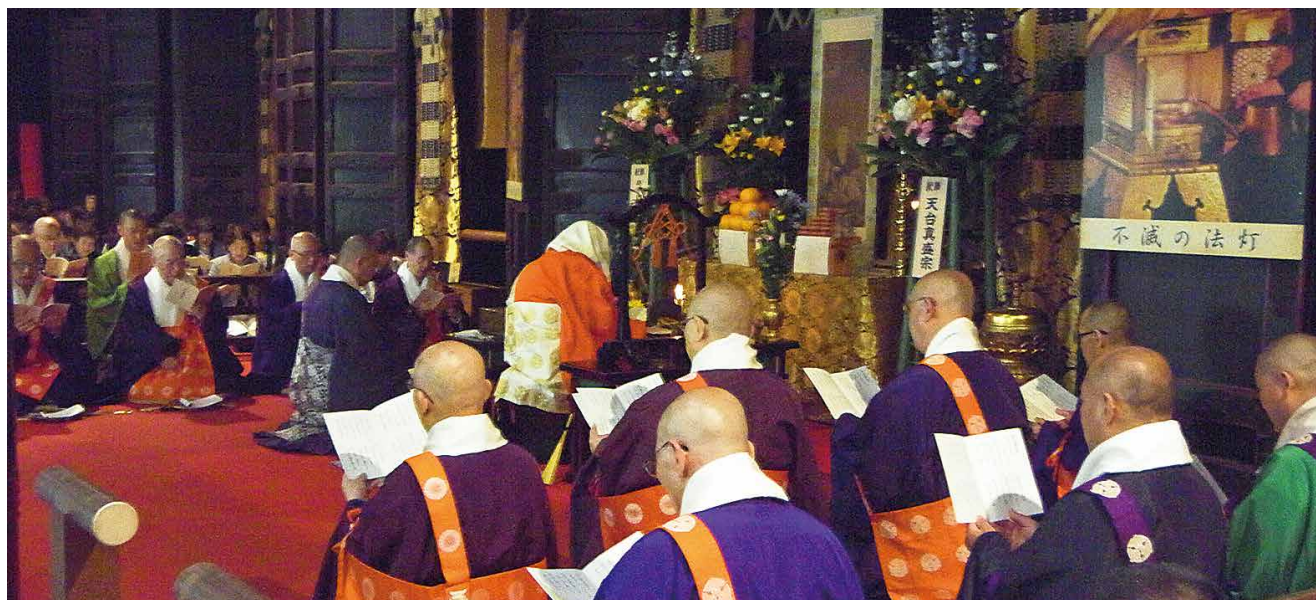


根本中堂へ向かう出仕僧侶



正面に恵心僧都御影像が掲げられる





管長猊下並びに出仕僧侶



参拝者により法要前後に真読念仏が勤められる



伊賀教区御詠歌講による御奉詠



全員で恵心僧都御和讃が唱えられる



## 社会部だより

## 日本天台三本山「仲秋の名月と天台声明の響き」

大津市には、日本仏教の母山ともいわれる「天台宗総本山比叡山延暦寺」をはじめ、「天台寺門宗総本山三井寺」、「天台真盛宗総本山西教寺」という天台三総本山があります。各寺の歴史、由緒、有する文化財をみても、それぞれに関係するところがあり、また三総本山共に「天台薬師の池」と歌われた日本一の雄大な琵琶湖を眼下に望める



昨年三井寺における 天台声明の響き

景勝の地に位置し、静寂の中、四季折々を感じられる自然が、訪れる人々を癒しの世界に誘う共通の環境のもと、一昨年よりびわ湖大津観光協会が中心となり、三総本山が協力して当地へのたくさんの方に参拝していただくためのイベントを実施しています。

昨年の三井寺における「天台声明の響き」に続いて本年は西教寺に舞台を移し、下記のとおり「仲秋の名月と天台声明の響き」と題したイベントを開催します。

この機会に宗内の皆様にも是非参詣頂きたく御案内いたします。

## 記

日本天台三総本山合同行事「仲秋の名月と天台声明の響き」

(一)日時 九月十四日(水)

## 表紙説明

## 萬日法会供養塔

本山西教寺では、宗祖滅後不断念仏相続一万日ごとに万日法会が執行されてきた。本堂前には、不断念佛万日法会を記念して建立された万日法会記念供養塔が十二基並ぶ。記録に残されているのは、宗祖二百回忌にあたる元禄七年(一六八七)の七万日法会からである。その右端には「奉称念弥陀宝号七万日餘 有縁無縁皆成仏道」「元禄七甲戌天三月」と紀年銘がある。

## 菊料理のご案内

西教寺菊料理膳の9品。なます(上段中央)は穀山しめじ、一夜漬け(下段中央)は草津のコマツナを合わせるなど湖国を中心に食材を吟味する。菊の花をつけ込んだ菊酒(中段右)は味がまろやかになり色もこはく色になる2、3年ものが主で、重陽の節句にも飲まれる



大津市坂本の特産の食用菊を使った料理。菊寿司、菊なます、菊酒など菊づくし。

坂本では、昔より「菊を食べないと秋を迎えた気にならない」といわれるほど、松茸や栗より身近な秋の味覚のひとつなのだそうです。ここ西教寺では、鮮やかな色目と香り・しゃっきりとした食感の坂本菊(食用)を味わうことができます。

食前酒からデザートまで、すべて菊料理のフルコースは、この時期、この地でしか味わえないもの、目で、舌で、秋の坂本を満喫できます!

## 西教寺菊料理膳

(期間限定11月10日より30日まで!!)

## 菊料理の料金

「1膳2,500円(拝観料別)」

●要予約(必ずご予約申し込みを!1日限定150席)

お申し込み/西教寺事務所 大津市坂本5-13-1

TEL.077-578-0013

- 一八・三〇・二〇・〇〇  
(二)場所 西教寺 本堂  
(三)内容 三総本山それぞれに特徴のある天台声明  
(四)料金 一名五百円

## 団体参拝

ありがとうございます

平素は、多数、檀信徒様の総本山への御登山、御参拝を賜り誠にありがとうございます。

今後共、各末寺の御住職、檀信徒様によりよいご参拝がいただけますよう拝観案内等の充実につとめてまいりますので、たくさんのお参拝をお待ちしております。

## 三月

三日 伊賀教区西部組西光寺様

団体参拝 四十八名

## 四月

十九日 福井教区東部組粟生寺様

団体参拝 十八名

## 発行所

天台真盛宗教学部

大津市坂本五丁目十三-一

総本山西教寺内

電話 大津 (〇七七)五七八-〇〇一三番代

## 印刷所

宮川印刷株式会社

大津市富士見台三十八

電話 (〇七七)五三三-二二四一